

第13回「日本語大賞」

テーマ「 」に伝えたい言葉

高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

知らないでは済まされない問題

東京都

渋谷教育学園渋谷高等学校

一年 近藤 千紗

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

知らないでは済まされない問題

渋谷教育学園渋谷高等学校 一年

近藤 千紗（こんどう・ちさ）

誰しも、人生のなかで「三秒前に巻き戻したい」と思った瞬間があるのではないだろうか。私も何度かある。お弁当のおかずを床に落とした時、ラインを誤送信してしまった時、授業中であてられて答えられなかった時など。なかでも、四年前のことは、今でも忘れられない。

私は、父の仕事の都合でイギリスの現地小学校に転校した。初登校の日に、受付の人に連れられて六年生の教室に入ると、その場でおしゃべりしていた女の子たちが、一斉に私を取り囲んだ。名前は何か、どこから来たのかなど、四方八方から質問が飛んできた。私が必死にイエスやノーと答えると、今度は、皆が順番に自己紹介を始めた。ソフィアちゃんは、「オハヨウゴザイマス」と挨拶して、小さい時に日本にいたと教えてくれた。そして、ファティマちゃんの番になり、

「ハロー、チサ、私はファティマ。よろしくね。」

と言葉をかけてくれた。私はうなずきながら、

「ファティマという名前、素敵だね。」

と言うと、彼女はニコニコしながら答えた。

「イスラム教だね、『可愛らしい』って意味なんだよ。」

「えっ、イスラム教？」

私は固まってしまった。その瞬間、ファティマちゃんの顔から笑顔が消えた。

驚いてしまった理由は、私のイスラム教への偏見以外に他ならない。イスラム教に対して偏った見方を抱いてしまった要因はいくつかある。イギリスに行く二三年前から、イスラム教スンニ派の過激派組織、自称「イスラム国」による自爆テロが、各地で相次いで起きていた。テロが起きるたびに、「イスラム教徒はテロを起こす危険な人達」という悪い印象を抱いてしまった。さらに、二〇一五年には「イスラム国」による日本人人質殺害事件が起きた。ニュースでは連日、黒ずくめの兵士たちが射撃訓練をしたり、人質を跪かせて声明文を読んだりする様子を流した。それは異様で怖かった。しかも、その時に人質になってしまった方のご実家が、自宅からそう遠くない距離にあった。周辺のコインパーキングには、各テレビ局の中継ワゴン車がアンテナを高く伸ばして四六時中停まっていた。その前を、いつも張りつめた気持ちで通り過ぎていた。

一連のテロや人質事件は、イスラム教の一部の過激な人々が起こしたものと説明を受けても、「イスラム教」という言葉と「イスラム国」の不気味さがリンクしてしまった。その根底には、イスラム教についての私の知識の無さもあった。あるいは、日本人の宗教への関心の無さ、と言った方がよいだろうか。

キリスト教や仏教についてはある程度の知識を身に着けている人はいるだろう。しかし、それ以外の宗教となると「よくわからない」で済ませてしまう人は、実は多いのではないだろうか。世界の宗教について「知る」努力を、われわれ日本人は怠っている。宗教はデリケートな問題を含むため、知らなかったでは済まないこともある。日本では、無宗教の人が占める割合は約七割と高いが、だからと言って、宗教に対して無関心なままでいて良いというわけではない。いくつかの宗教について基本的な知識を身に着けておくことは、これからの日本人には必要だと思う。

多民族が暮らし、各人のアイデンティティを尊重するイギリスでは、公立校でも私立校でも、九年生（日本の中学二年生にあたる）までは「宗教学」が必須だ。また、中学の最終学年の十一年生では、中学卒業資格を兼ねた「統一試験」を受けなければならないが、その受験科目として「宗教学」を選択できるため、七年生から教科書を用いての本格的な宗教の授業が進められる。キリスト教、イスラム教、ヒンズー教、ユダヤ教、仏教、シーク教などについて、経典の一部を暗記したり、寺院に見学に行ったりと、詳しく学習する。授業で、少しずつ知識を取り入れていくことで、私の「イスラム教とは、得体の知れない宗教」という愚かな偏見は払拭された。「イギリスで体験できて良かったことは何か」と聞かれたなら、私は「宗教学の授業を受けたこと」と即答する。

残念なことに、ファティマちゃんを含め同級生の多くは、六年生終了後、別の中学に進学した。結局、私は彼女に謝ることができずじまいだった。この春に帰国して、イギリスを思い出すと、いつもこのことが心に引っかかっていた。だから、今、ファティマちゃんに伝えたい言葉がある。

「あの時、私の偏見であなたを傷つけてごめんね。」